

日本薬学会会頭メッセージ

(京都大学大学院薬学研究科・教授) 高倉喜信

公益社団法人日本薬学会は、1880年(明治13年)4月に創立された約140年の歴史を有する学術団体です。初代会頭の長井長義先生の薬学に対する情熱に端を発した本学会はその歴史と伝統が継承されると共に、時代の変遷に伴って大きく発展してきました。現在、約16,000名の個人会員、約200の団体・企業の賛助会員を有し、「薬学」という共通のキーワードのもと、大学、企業、医療機関、各種研究機関、行政機関等、広範な専門領域からの多様な会員により構成されています。本学会は、各専門領域別の10の部会(化学系薬学、医薬化学、生薬天然物、物理系薬学、構造活性相関、生物系薬学、薬理系薬学、環境・衛生、医療薬科学、レギュラトリーサイエンス)および全国を地域別に8つに分けた支部をそれぞれ縦糸・横糸として設け、ダイナミックな学術活動を展開しています。部会の専門領域は多岐に渡りますが、長井長義先生がご専門とされた「化学」は最も歴史が長く、現在も本学会の柱の一つとして重要な位置を占めています。



日本薬学会の使命は、薬学という学問を発展させることで我が国の科学の発展に貢献し、科学技術立国としての日本のプレゼンスを向上させることと考えております。文部科学省が公表した「2018年度版 科学技術白書」においては、日本の科学力が10年前に比べて大幅に低下したことが報告されました。「化学」を重要な軸の一つとする薬学はライフサイエンスにおける広範な研究分野と密接に関連する重要な学問領域であり、薬学研究の発展は日本の科学力向上に大きく貢献するものと考えています。

また、次世代を担う若手研究者の育成・支援が我が国の国際的科学力を回復させる急務の課題と考えております。歴代のノーベル賞受賞者が我が国の将来を担う若手研究者の研究環境を改善すべきであることを指摘されている中、将来に向けての大学院博士課程への進学率は減少し続けております。このような状況を改善することを目的に、本学会は博士課程への進学を促進すべく2015年から長井記念薬学研究奨励支援事業を開始し、給付型の奨学金を提供し、全国の学生を支援しています。また、若手研究者に対する奨励賞の授与、あるいは各支部や部会での奨励賞等の顕彰や学術集会における優秀発表賞等の授与など、様々な顕彰事業を通じて学部生、大学院生を含めた若手研究者を支援し、モチベーション・インセンティブを高揚させることに努めています。さらに、支部活動を通じて高校生が自らの研究発表をする「高校生オープン学会」の開催、小学生の親子を対象として自らの手でオリジナルの錠剤を作るなどの体験型学習「子ども実験企画」の実施など、より若い世代にもサイエンスを体験させることで将来、研究者になりうる人材の育成に繋がる活動も行っています。

日本化学連合は「化学」をキーワードとして広範な領域に渡る14の学協会から構成される正会員および賛助会員を束ね、延べ8万人以上の研究者・技術者が所属する学術団体です。日本薬学会は、2007年の日本化学連合設立当時からの正会員として、まず、日本における学問としての「化学」が目指すべきビジョンを日本化学連合にお示しいただきたいと思っております。現在、様々な領域で技術革新が急速に進展しており、「化学」の位置付けや「化学」に期待されることが変化してきていると考えられます。このような歴史的な変化を十分に踏まえた上で、ビジョンを描くことが重要だと考えます。そのビジョン実現に向けてステークホルダーである各学協会が持っている特徴・強みをどのように活用できるのかを双方向の議論を通じて構築することが必要だと思っております。構築されたアイデアに基づいた具体的なアクションプランを立て、ビジョンを具現化することができれば、日本化学連合が目的に掲げている「化学と化学技術の振興を通して社会に貢献する」ことが達成されるのではないのでしょうか。また、日本化学連合に求められるのは、技術革新の流れを踏まえた国への政策提言や産業界への働きかけはもちろんのこと、若手化学者に夢と希望を与えること、さらにはより若い世代の学生や子供たちに「化学」の魅力を伝えることによって我が国の「化学」のプレゼンスを向上させる人財養成のプラットフォームを提供することではないかと個人的には考えています。